

櫛かんざし美術館

櫛かんざし美術館では、4,000 点以上の髪飾りが展示されています。コレクションは、京都の祇園で生まれた岡崎智予さん（1924-1999 年）から始まりました。岡崎さんは芸者だったと言われています。岡崎さんが約 40 年をかけて髪飾りや装飾品を収集し、それを、青梅のレストラン経営者が購入したものです。新たな所有者は、コレクションを倉庫に保管しておくのではなく、美術館にしようと決めました。一時に展示される装飾品は、通常、約 400 点です。

コレクションには、江戸時代（1603-1867 年）から昭和（1926-1989 年）の櫛やかんざしが含まれています。装飾品の多くは、金箔の背景に花などの自然物体を描く琳派を発展させた尾形光琳（1658-1716 年）などの工芸家が、裕福な顧客向けに作った特注品でした。

櫛かんざし美術館のコレクションは、日本のファッションにおける社会的な変化の影響を強調しています。べっ甲（江戸時代の禁輸対象品目）製の初期の櫛は、家一軒ほどの値がついたものと思われ、その富のほどを表すものでした。江戸時代に入って建築様式がより複雑で装飾的になるのに合わせて、髪型もまたより大きく凝った装飾になっていきました。精巧な装飾品は、象牙やべっ甲、硝子で作られ、漆を塗り半貴石をはめ込んだり、金をちりばめたりして作られました。櫛かんざし美術館では、大名や侍階級の女性向けの地味なデザインや、裕福な商人の妻などが付けていた目を引く装飾品、そして、色鮮やかで遊び心のある舞子さん向けの装飾品などの違いを見て取ることができるでしょう。

明治時代（1868-1912 年）に日本が現代化を果たす中、女性はより洋風の髪形をするようになり、髪飾りはより小さく目立たないものになっていきました。櫛かんざし美術館のコレクションは、セルロイドなどの新しい素材により、より手ごろな価格で凝った髪飾りが提供できるようになった、戦後の時期のものまで続きます。

櫛かんざし美術館には、階級の高い侍や裕福な商人が所有していた携帯用筆記用具（矢立）も展示されています。その多くは、木製、金属製、あるいは象牙でできた特注品で、複雑な彫刻や象眼が施されています。ひょうたんから銃まで存在する形状は、筆と硯さえ収まれば、後は作者の想像力によるものでした。常設展示に加え、櫛かんざし美術館では、着物の帯に差して用いられていた印籠）などの関連品の季節展示も行われています。

櫛かんざし美術館の建物は、伝統的な蔵を模して建てられたもので、正面には大きなかんざしが飾られています。御岳溪谷の絶壁に建てられており、多摩川を眺めることのできる大きな窓と、回遊式庭園があります。

櫛かんざし美術館は、午前 10 時から午後 5 時まで営業しています。（月曜日と金曜日は休館日です。）